

まんぷくちやうじやたからのくらいり

『萬福長者寶藏入』

影印と翻刻・解題——（上）

白戸 満喜子

本稿では国立国会図書館所蔵の『萬福長者寶藏入』の翻刻と解題を試みた。『萬福長者寶藏入』は『国書総目録』および『日本小説書目年表』の記載では、浮世絵師・歌川国芳による自作・自画とされている。同じく、両書では刊年は不明とされているが、本書の一丁表にある改印から刊行は天保十四（一八四三）年から弘化四（一八四七）年の間ではないかと推測される。

『萬福長者寶藏入』は自筆稿本が天理図書館に、版本は当館と大阪府立中之島図書館・名古屋市蓬左文庫に所蔵されているが、諸本により本文・刊記ともに異同がある。当館所蔵本は明治四十二年に朝倉龜三（無聲）氏より帝国図書館に寄贈された。なお、本号には書誌事項と翻刻・影印（上冊）を、次号には翻刻と影印（下冊）ならびに解題を収録する。

一、書誌事項

請求記号	二〇八―七一一
形態	上・下二冊 一七・七×一一・八センチ
原表紙	帝国図書館後補の厚表紙で一冊に合冊。 多色摺の絵表紙
上冊	右上方「一勇齋國芳画作」 右下方「藤慶板」
下冊	右上方「⑤」 左下方「応需 外題 豊國画」
題籤	各冊刷題籤 上冊 上方右から左へ「寶の」 下冊 上方右から左へ「蔵入」
丁付	上冊 一―十、下冊 十一―二十
	一丁表の上欄に「村松」の改印あり。 六丁表上欄に「二」、十二丁表上欄に「三」、十六丁表上欄に「四」とある。

版心書名 上下冊共「万ぶく」

作者名 上冊十丁裏右下方に「國芳画作」

下冊二十丁裏右下方に「一勇齋國芳画作」

刊記 下冊二十丁裏左下方に「江戸本郷五丁目 藤岡屋慶次郎板」

二、翻刻・影印

凡例

翻刻は底本の復元と通読の便を考慮して次のような方針によった。なお、刷りの状態や汚れのため、底本では読みにくい箇所については大阪府立中之島図書館本を参照した。

1、通読のために適宜、読点・句点を施し、会話に相当する部分は「」でくくった。

2、漢字は現在通行の字体とし、異体字・略字・合字は正字に改めた。漢字の字遣いは当時の慣用と認められる場合には変更を加えなかった。

3、仮名遣い・清濁点・記号等は底本のままとした。

4、意味を明らかにするため、丸括弧のルビで漢字等を補った。

5、文は基本的に見開きの右上から地文、会話文の順に読んだが、場面によっては適宜順序を変えた。

6、各丁表・裏はオ・ウと略記した。

上冊

一丁オ

萬福長者寶藏入

其智には可^レ及其愚には不^レ可^レ及とは聖人の格言。そも

／＼是は愚の愚たる趣向を種に何人か作り出し、物なれ

ども、莊子の空言、佛者の方便、用捨は具眼の看官に有

なん。斯る草紙も取所ありとは本屋の商ひ口、無物喰

は買人の癖、京傳好の童子氣質に呈する作者の意なる

べし。

應求はしがきするは御ひるきの教訓亭春水述

二丁オ

春風やふくは来にけり萬歳のこゑより笑ふ門の梅かな

宝田千町

二丁ウ・三丁オ

むかし／＼とくわか万左エ門といふとくじんありし

が、きん／＼ざいほうかずのくらにみち、でんぱたちや

しきもちあぐむ^(倦む)ほどありしに、ちやうしや三代なしといへども、この万ざゑもん^(天)のいへばかりはいく代つゝ^(開闢)くともかずしれず。てんちかいひやくよりこのかた日本くさわけのふく^(福者)しやにてまことにめでたうさむらひけるより、とくわかちやうじやといひそめける。女ぼうの名はおふくといへり。そのうつくしきこといはんかたなく、ふくをさづけたまふべんてんさまからうはまへをとらふといふほどのきりやうなり。代々ちやうじやのふく^(器量)とくによつてにはのつき山^(藥山)のたきよりはなん万りやう^(画)ともしれずきんぐがなかれおち、またはかねのなる木だんくふえ、めばへのうちはちいさなはちへうえ、大きくなるにしたがひてだんく^(相談)にうえかへるゆゑますく大かねもちになり、どうともかうともしかたなく、あるときおふくとさう^(相談)だんして、ちとかねのへるやうにしたいものだと、いろく^(減る)にくふうすれども日にましてふへてこまるゆゑ、いつその事ふくじんたちへ御きたうをしてふくをさづけたまふことをすこしひかへてもらふがよからうと、ふくじんまいりをはじめるつもりにせしが、

とりわけべんてんさまは大ふくしんといふ事ゆゑ、まづ^(江の島)ゑのしまへだい、ちばんにゆきて此わけおねがひまうす^(申す)がよからうと、そのさうだんにきはまりける。

○かくてまんざゑもんは七ふく神めぐり^(巡り)をはじめ、まづ^(四方)ゑのしまのべんてんさまへと思ひたちしが、かごにのりてはよものけしきもおもふやうに見られず、うまにのりてははねられるがこわし。しづかにけんぶつをしながらあるくにはうしにのりてゆらりく^(ふと)とゆくのがよからふと次へ

(広告)

版元口上 海内第一のふやく 仙方人參丹 一戈十二刃小うり壺刃より ○大人おもし病^(負ひ)をおひじゆつなきに^(効)そく功あり。小児しよひやう^(諸病)にもつとも妙なり。

○右の御くすりは古今ならびなきじんやく^(腎藥)なり。仙方にてねるゆへ、そのあぢはひあまうしてこ^(効)うのうしやく^(能諸藥)に万々たり。一切の男女小児第一きよそん^(虚損)をおぎなひ、

(逆上)のほせを引きげ、(痰咳)たんせきをおさめ、婦人(産前)さんぜんさんこ、小児のねにつんにそく功有。すべてこれをはつする人、(息繼)いきつきみじかきに半戈用ひて即功神のごとし。

加州金沢文海堂製 江戸元取次所 此(3)(草紙版元)さうしはん元 藤

岡屋彦太郎

三丁ウ・四丁オ

つゞき五六ひきのうしをそろへ、みなくほどこしの

ためにとて、あまたのかねばこをうしのせなかにおはせ、おほくのともをさそひてさんけいにおよびける。か

くて江のしまへさんけいして、とうそすこしのうちふくをおさづけなさる事をおみあはせくださるやう、いつし

んにおねがひ申せしところ、(御斗帳)みとちやうのうちよりさも

うるはしき(御声)おんこゑにてへんでんさまのおつしやるには

「さてもその(方)はうは見かけにあはずむりなるねがひを申

すものかな。そちのせんぞよりいまにいたるまで、人に

(慈悲情)じひなさけを第一としておほくの人のなんぎをすくひし

(陰徳)いんとくによつて天よりさづけ給ふふくなれば、えい代

やめる事はなりがたく、わがちからにもおよびがたし。

しかしながら、そのほうがねがひもまた(黙し)だしがたけれ

ば、七ふくじんなかまへさうだんしてわれくがそちへ

さづくるだけのふくをせかい(世界中)ぢうへわりふり、いよく

ますく百まんねんも(豊年)ほうねんのつゞくやうにまもるべ

し。あとの六ふくしんへはわれよろしきやうに申おか

ん。そちは(構わず遊山)かまはずゆさんしていよく(栄華)ゑいぐわをたの

しむべし。ゆめくうたかふ事なかれ」

と、世にありがたきおんつけをぞか(被り)ふむりける。

(おふく)

「もし、だんなさん。こんな(拵)こしらへでたびをするのは

(気散じ)きさんじでようござりますねへ。なんとよいけしきでは

ございせんか」

四丁ウ

さてもまんざゑもんはべん天さまのおんつけにてせかい

(富貴)ぢうふつきになるとき、大きによるこび、それよりわが

やしきへかへり、ころしも三月の事にてにはの宝山をひ
らき、^(勝手次第)かつてしだいに^(見物)けんふつをいれければ、その
くんじゆのおびた、しきことなか／＼ことばにつくされ
ず。そのうへ「こゝろしだいにたからをひろふべし」と
山のうちへたかふだをたてけるゆゑ①
①おもひ／＼につみくさをするこゝろにてたからをひろ
ふ。

五丁ウ

さてふく神たち申あはせてせかいがふつきになるゆへ
に、四月になつても一本三両だして^(食)くふ人も、あはせ
るとにきづかひなくペン／＼ぐさをさげなくつても、な
にかにむしのつくといふ事なし。^(虫)しぎやきなんでもいつ
もとちがひぐん／＼とできる。

(魚を持った男)

「いつもならまだ／＼と^(飛)ひのうをもこねへじふんでごぜ
へやすが、ことしからいよ／＼よの中がよくなるから、
^(鰻)かつほなんぞはりやうしのふねへひとりでにほん／＼と

とびそうでこぜへやす」

(男)

「ぜんてへ、ゑびすさまもたいよりかつほをつりそうな
ものだ」

(男)

「ナゼ／＼、つまらねへ事をいふぜ」

(男)

「それでもかつほの事を^(烏帽子魚)ゑぼしうをといふから」

六丁オ

○かしはの木へはかしはもちがなつて、も、^(桃)やあんずの
みのなるやうに、五月のせつくには^(節句)てうどくひごろにな
つてゐるゆへ、かしはのはを^(葉)かふのこなを^(買)ひくのあん
をこしらへるのといふ手のかゝる事もなく、木からもい
で^(重箱)ぢうばこへつめてくばる。こゝらはふくのかみさまも
たばこやすみのおもひつきなり。

(父親)

「かしはもち^(実)へみがいりすぎていがぐりのやうには^(葉)の中

からあんをはみだしてゐる。まだまへかたのは、はにく
つついてならねへ。ヲ、よいまにいゝのをとつてやる
から下にまつてゐなよ」

(子供)

「おらもあがつてあんもとらう。よう／＼ちゃんや
／＼／＼」

六丁ウ・七丁オ

六月は又ゆふすゝみで大川では△

△はな火を^(上げ)あけ、やかたやねふね小ぶねにて大川もう
まるほどは^(繁盛)んぜうする。此せつは花火も又^(二)トふう^(風)
かはつて、うつはうに火をもちひす、うちあげの中より
ほん／＼と^(宝珠)ほうしゆの玉をうちいたすゆへ、たゞのはな
火のやうにあぶなくな、わざ／＼ふねを^(近所)きんじよへ
^(漕ぎ寄せ)こきよせいろ／＼のものをもつて玉をひろふ。見るはか
りではなくとく^(得)がつくゆゑ、いよく人おほくいで、こ
とのほかにぎはひける。

(屋形船の客)

「いよ、玉やア。ほうしゆの玉は又かくべつだ。ほうし
のたまでいわしがとれるはどうだ、きこへるか」

(小舟の男・右)

「ことしはいつもとちがつて火でなくつてたからといふ
ものだからやばでねへ。おらア、七八十ひろつたぜ。中
でちいせへのを^(緒締)じめにしやうとおもふがどうだらう」
○花火の中よりたからのかぎや玉がぼん／＼でるゆへ、
今の世までも花火はたまやとかぎやにかぎつてゐるもよ
いおもひつきなり。

(小舟の男・左)

「そりや／＼、そこへくる。しめたく。おつとせんさ
ん、もちつとおもかぢにしてくんねへ。そうだ／＼。な
むさん、むかふのふねへとられた。玉たまくれば人のふ
ねだ」

七丁ウ・八丁オ

さて七夕さまになるといつもよりことしはなほ／＼世が
よいゆへに思ひ／＼に御ちそうにいろ／＼なるものをこ

しらへ、ほしまつりをするところに天の川にはじせいと^(三 星)

もしゆびよくおあひなされたゆゑに、げかいへはすこしもあめふらず、^(凡 夫)ほんふはあめがふらぬとわるいやまひがはやるといつてきをもむゆへに、ふく神たち○

○さてくわからぬやつらだとおもひ、よし／＼そんならふらしてやらう、とあめのかはりにかねをちら／＼ふらせければ、そのよろこびしやうちき^(正 直)なものにて、かういふ事ならまいねんあめはないがよいとは、よくのいはなしなり。

(女)

「りんや、アレみな天の川がきら／＼ひかつて、とおかねをちらしたやうだよ。アレ／＼、今おほしさまがこつちへおとびなすつたよ。こんやけんぎ^(牽 牛)うさまとしよく女^(織 女)さまが天の川のむかふとこちらでおでやいなさるそうだが、わたる■

■はしがないとき。とんといもせ山^(妹 背)のやうだね。そうするとかさ、ぎがはしになつてわたしておあひなさるそうだが、さぞうれしからうねへ」

八丁ウ・九丁オ

○すゞめどもはらつこなしとて、もちまへのすゞめおどりへほうねんおどりをまぜておどる。

○七ふく神の御せわにて、田の神やはたけの神大はだぬいではたらき玉^(給)ひしゆへ、いねはほにほがさいて竹やぶのやうにでき、あはばたけはたはらをならべたるごとく、みちばたにできたひゑも一トほふるへば一斗からはぢやうぶ^(丈 志)にある。めつそうもない▲

▲田はたの大あたりなり。さて大こく、ふくろくじゆは五こくのはうをあづかりしゆへ、兩人^(野 良)してのらまはりをしてよろこび玉^(給)ふ。

そのほか大^(大豆 小豆)つ小づはいふにおよばず、くだものるいにいたるまでみのらずといふことなければ、これにておしはかるべし。

○すゞめども一トつぶひろつてくふと、ゑぶくろ^(胃 袋)がいつはいに^(杯)なり、ごろ／＼してほ^(穂)をあらさぬゆへ、なるこのか、しのと、とりをおどす^(道 具)だうぐもいらず、こんな

せわのない事もないものだ。

(男)

「こんなにはうねんな事もねへもんだ。たいそうにはうねんだ」

(男)

「あはを一トほきると四斗びやう(俵)になるとはたいそうなできじやアねへか。ほんに四斗びやうばかにしたやうだ」

(男)

「ありやせい、こりやせい、よいくく」

(男)

「さくはほうねんのみつぎものにしたかひはいかゞでござんす」

(男)

「ア、せつねへ。あは(二)ひとつふで(粒)おけはよかつた。きみ(黍)のはん(半)つ(粒)ぶが(過ぎて)すきてはらがくちくつてうごかれねへ」

九丁ウ・十丁オ

ひでりどしにはいもに子がつかず、しけどしにはこがつくのなんのといふはなみく(の)のよの中の事。かういふ大々ほうねんになつてきては、いもを一トかぶ(株)ふるふと四斗だるにいつぱいにあまるし、はは(葉)あめうりのかさのやうにできて、ゆふだちのときはかさのかはりにして一トはの中へ十七八人つゝはいつてあるく。さて、よくにかぎりのないものにて、あまりなにかゞできすぎるが、とてもものにひとふりあればよいと、みなく思ふとすぐにばらつきだして、一日大ぶりにふるところがしまいにはあめはやみて小ばんそのほかいろく(な)かねがふるとは、まことにめでたうさむらひも町人も大よろこびのよのなかなり。

(男)

「おれはときならぬ山ぶきの花がちるかと思つた。こゝに三両かしこに五両、これはゆめかやうつゝ、かや。たんとひろつて今までのしやつきをうめがえとしやう」

(男)

「あいたく。おしなさんな。これさく。おれが

おさへてゐるものをむりばかりするぜ。よしねへく」

(男)

「ひやはひへつもつたのはだれもきがつくめへ。あとで
そつといつてひとりでしめこのうさぎ。うまいく」

(女)

「おはなしよ、おいろさん。わたしが見つけたのだよ。
ふけいきなおふぎけでない。おはなしといふにどうせう
ねへ」

(女)

「おやく、これはわたしがききへおさへたのだから、
おかめさん、おまへはおはなし。おはなしよく。はな
しのような人だなう」

(男)

「とつこいく。小ばんですべつたぞ。ふるはく。こ
れをしつたらかますを十ばかりもつてくればよかつた①
①かますにひやうたん、ぬらくらすべつてひろひに
く
い」

十丁ウ

木々のにしきするじぶんになりければ、木のえだこども
もみが五六疋つ、かゝつてゐてうつくしきこといはんか
たなく、いつもかいあん寺やせうとうじへかうえうを見
にゆくやうに人のでる事おびたし。此もみのちを見に
ゆくやうに人のでる事おびたし。此もみのちを見に
るといふ事をのちにはの、じをはぶいてもみぢ見といひ
ならはしけるとぞ。もの、ふのもみぢにこりず女とはと
しう(以下欠)

国芳画作

註

- (1) 著者が書物を通じて呼びかける詞で、ここでは読者のこと。
(2) 未詳。発熱のことか。
(3) 刊記では版元は「藤岡屋慶次郎」である。慶次郎は彦太郎の
弟で嘉永五年四月に兄より問屋株を譲り受けている。詳細は
解題で述べる。
(4) 海晏寺と正燈寺は、ともに品川と吉原界隈の紅葉の名所。